



Title	友岡學先生のご逝去を悼む
Author(s)	武藤, 雪下
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 45, pp.[1]-[2]; 1992
Issue Date	1992-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/33210
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T02:38:35Z

友岡學先生のご逝去を悼む

教育学部長 武藤雪下

友岡先生、友岡學先生、突然の思いがけぬ御逝去の報、それが事実であることを知らされましたとき、なぜ!! どうして!! を連発せざるを得ませんでした。

「検査のためにしばらく入院するから」とおっしゃった言葉は普段と変わらぬ気軽くあっさりした声の調子で、何の心配も致しませんでした。検査が少し長びいたようでしたが、お電話致しますと、「大したことはない、元気にしている」ということで、すぐにまたお目にかかれるもの信じて疑いませんでした。病院へお見舞に伺いました折にも、学部のことや、学生のことを気になさり、病院に来て貰ってでも指導したいと言っておられました。お声にはいくらか張りが無いように感じられましたが、その責任感の底に流れる精神力の強さから必ず病気を克服なさるであろうと感じました。ゆっくり静養をなさって一日も早く我々の前に元気な姿を見せて下さる様お願いしてその場を辞したのでありますが、とうとうそれが最後になってしまおうとは、人の世のはかなさに愕然としてことばもありません。

先生は九州大学経済学部卒業後、大学院経済学研究科へ進まれ、同大学助手を経て、鹿児島県立短期大学助教授から、昭和43年長崎大学教育学部助教授、49年教授に昇格され、51年からは長崎大学学生部長、更に長崎大学評議員等の要職にあつて、一教育学部のためばかりでなく全学の発展のために誠心誠意、精力的に尽力されましたことは、人皆が認める所であります。

真摯な研究者としての先生は、その多忙な日々の中で、ご専門の経済学に関して多くの著書、論文を世に出されました。日本農業問題への取組みから出発された先生のご研究は、主題を経済学の根源に遡る哲学的見直しへと移して続けられ、「経済学への提議—基礎的諸概念の再検討」をモニュメントとして残されました。更に「経済学における政治言語」の中で、特に「社会主義」関連で発生する言語上の倒錯現象を論じ、それをこれからの主要関心事として、更には、現存する社会主義に案外気付かれない面のあることを指摘され、その起因する所を探し求めて、成果を世に問いたいと述べておられました。その旺盛な研究意欲には、ただただ驚き入るばかりでございます。

先生が此等の問題について思索を重ねておられた頃でしょうか、教育学部が大学院設置に向けてスタートを切りました際には、準備委員長として、また設置推進委員会が発足しましてからは、副委員長として推進役を担って下さいました。

頻繁に開かれる委員会で、お見受けした限りでは大変元気でいらっしゃいましたが、今にして思えば、既にその頃から病魔が先生の御身体を蝕みつつあったのでありましょう。そのことを察知できなかったこと、残念でなりません。

友岡先生について思い起こされますのは先生がお酒の席などで、人々の郷愁をそそるような響きを以って歌い上げられる「竹田の子守唄」で、心に深く感銘を与えたものでした。しかしそれを再びお聞きすることも叶わぬことになってしまいました。困碁の高段者とし

て知られた先生は、向う所敵なしの強さでしたが、今では親しく教えを頂くことも叶わなくなってしまうました。本当に残念でなりません。

長崎大学御着任以来、22年余、研究に教育に、私どもの良き隣人として共に過ごして下さいました先生にこんなにも早くお別れすることになってしまうとは、人の世の運命とは申せ、恨みに思うばかりでございますが、今はただ先生の御冥福をお祈りするしかありません。友岡先生、どうか安らかにお眠り下さい。

合掌

平成2年12月6日